地方を元気にする人たち
No.6
Takamatsu

公共交通を基点にあらゆる人がふれあう街へ

2

2011年に開業100周年を迎えた香川県の私鉄ことでん。単なる移動手段ととらえられていた鉄道だが、ここ数年エンターテイメント性が加わった。キャラクターの「ことちゃん」は子どもや女性に大人気で、グッズが販売されるほど。現役では日本最古、大正時代製造のレトロ車両でお茶会やライブを開催したり、若手カメラマンに車両工場の撮影を依頼し、写真集『ことでん 仏生山工場』を全国発売するなど、ユニークな試みをしている。ことでんを舞台にした映画も公開され、秋にはなんと電車の工場でサーカスが行われる。仕掛け人は、取締役の真鍋康正さんだ。

「沿線にお住まいでも、10年以上ことでんに乗っていない方がいます。何かのきっかけに、電車に親近感をもって下されば」

昭和40年代をピークとするモータリゼーションは公共交通の必要性を低下させ、県庁所在地である高松市でも、住宅や商業施設の郊外化が進んだ。

「たしかにご家族で出かけるなら車が便利です。けれど電車には小さな社会があります。子どもからお年寄りまで、老若男女が同じ空間で過ごす。車内で赤ん坊が泣き出すと、隣のおばあさんがあやすこともある。電車はそんな、家庭や学校ともちがう、つながりの場なのです」

価値観が多様化するいま、ただ便利であることとは異なる、多様な人のふれあいが生む豊かさを提案しようとしている。電車を社会にたとえるのは、地域社会の未来を見据えているからだ。

「いま、高松市とコンパクトエコシティづくりを進めています。環境にやさしい公共交通を使いながら、あらゆる人たちが自由に移動し、集い、ふれあいながら暮らせる街。地域の豊かな文化がそこから生まれると信じています」

以前、旅をしたヨーロッパでは、満足度の高い公共交通での移動が当然とされているのを目の当たりにしたそう。世界各地の自由な移動のための取り組みも、参考にしているという。

駅を拠点とした街づくりは、仏生山（しょうざん）駅周辺でもスタート。温泉施設やカフェ、宿ができ、市民病院の移転も予定。

「仏生山温泉」の入浴券と乗車券を兼ねたうちわ型切符を販売し、好評だ。

ことでんのさまざまな取り組みには、地域の未来への思いが込められている。

Profile

▶ 高松琴平電気鉄道（ことでん）取締役

真鍋康正さん

［まなべやすまさ］

1976年香川県生まれ。一橋大学卒業後、東京でコンサルティング会社、投資会社等を経て、2009年に帰郷。高松琴平電気鉄道株式会社の取締役に就任、現在に至る

文＝山下亜希子　写真＝中村政秀　text:Akiko Yamashita　photo:Masahide Nakamura